哀歌

遠藤周作

講談社

哀歌

定價／五八〇圓
昭和四〇年一〇月二五日發行
著者／遠藤周作
發行者／野間省一
發行所／株式會社講談社　東京都文京區音羽町三ノ一九
電話　東京（九四二）一一一一（大代表）　振替　東京三九三〇
印刷所／圖書印刷株式會社
製本所／大製株式會社

©遠藤周作　昭和四〇年　落丁本・亂丁本はお取り替えいたします。　Printed in Japan

目
次

I
再發 9
男と九官鳥 31
その前日 65
四十歳の男 83
大部屋 115
II
童話 143

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

雑木林の病棟　167
歸郷　189
札の辻　215
雲仙　237
私のもの　257
Ⅲ
例之酒癖　一盃綺言　281
あとがき　301

装幀／見返し繪　岩本正雄

哀歌

短篇集

I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

再
發

滿點とまではいかなくても佐田の妻はまずまず良妻のようでした。家事、料理、育兒という點で彼には妻君に不平をいうべき理由が別段みあたらなかったからです。

だが不平を言うべき理由がみあたらないのに、彼女にたいして佐田はいつも漠とした空虛感を感じていました。そのくせこの空虛感がなぜ起るのか、どこから來るのか彼にはよくわかりませんでした。

それは妻がキチンと掃除した部屋で花をきったり、こたつにあたって四つになる下の子供に繪本を讀みきかせている姿を見る時など、まるでぬるい液體のように彼の胸にこみあげてきました。夜おそく宴會から歸ってきた佐田に妻君が背後から着物をきせる時にも不意に感じることがありました。

「そりゃそうさ。どんな夫婦だって、同じだよ。」

ある夜、佐田が學生時代からの友人に酒場で會ってこの氣持を一寸洩らしますと、友人は大きく肯いて麥酒を飲みほしました。「女房という奴で主婦であり、子供の母親である以上、もう

女じゃないのさ。良妻であり賢母であるほど、女房は女を失うらしいな。」

そう言われてみると佐田はなるほどと思いあたります。結婚以來、佐田は妻君が妻君として成長すればするほど、彼女を一人の女として眺めるのを忘れていたし、妻君も妻君でいい主婦、いい母親になるために自分のなかの女を何時の間にか捨てていました。それが自分に漠とした空虛感を感じさせていたのだと佐田はやっと理解することができました。

しかし彼は妻にはそんな氣持を持ったことを一度も話したことはありません。友人に打ち明けて說明を求めたことも默っていました。

そのころ佐田は商賣上の取引きと調査とで二ヵ月ほど海外に出張せねばならなくなりました。九州出身の佐田の一族は明治以來製釘製鋼の工場を經營しているのですが、今度建築用の新しい釘を大量生產することになり、その機械を工場にそなえつけるために、佐田が一ヵ月か二ヵ月ほど獨逸に出かけることになったのです。

五、六年ほど前に胸をやった彼は外國に行くのが多少不安でしたが、その夜、晩飯の卓で冗談まじりに妻に言いました。

「お前も一緒についてきたいかね。」

もちろん、ついてくるかねと言っても佐田は本氣で誘ったのではありませんでした。しかしその時、妻は子供に魚をむしっていた手をやめると、白い顏をあげて今までに彼がみたことのないほど眼を光らせ、少女のようにコックリ肯きました。すると佐田は急に狼狽して下をむき

ました。

「ええ、行きたいですわ。」

「おい、冗談だよ。」

すると突然妻君は以前、胸の弱かった佐田がいつか海外旅行する時は看護婦がわりに連れていってやろうと約束したと言いだしました。そんな約束に毛頭おぼえのない佐田は、妻君がいつになく眞劍そのものな顏をしてこの約束を主張しだしたので驚いてしまいました。

ところが三日のちに妻君はこの約束を既に夫が認めたものとして話を進めてきました。「一緒について來るかね。」と冗談半分で洩らした佐田の言葉も彼女はいつの間にか「一緒についてこい。」という言葉にすり變えてしまっている。その上、彼女は自分自身がこの變化を行っていることに氣がついていないのです。

「俺はやっぱり、そんな約束をした記憶がないんだがなあ。」

「あら、その話はもうすんだじゃありませんか。」

「そうかなあ。だが、そちらさんの旅費はどうするんだ。」

「あたし一人分なら株を賣ればできるわ。どうせ、あの株は實家の父がくれたものですし……。」

佐田は一寸イヤな顏をして横をむきました。實家の父がくれた株だからあなたの懷は痛ませないでしょうと言う言い方が氣にくわなかったのです。けれども、そんな端たないことまで口に出すほど妻が顏を赫やかせているのを見て、佐田は今、彼女が主婦でも子供の母親でもない

一人の女に戻りつつあるような氣がしました。ともかく今日までまずまず不平をいうべき理由の見當らぬまでに家事をやってくれたのだからこの機會にサービスをしてもよいなと考えました。それに五、六年ほど前に胸をやられた彼はやはり一人で外國に出かけるのは不安でした。

こうして佐田は妻君をつれて飛行機に乘ることになりました。彼は夫婦同伴で海外に行くなぞ思いあがったことではないかと心配したのですが、妻君は案外平氣で出發前の準備に走りまわっていました。

十一月のある夜遲く、夫婦は一群の知人に送られて北極まわりの飛行機に乘りました。

ケルン、ハンブルグ、ストラスブルグと廻り十二月の上旬には日本に送るべき製釘機械の交渉もあらかた終りました。仕事がすんだあと一ヵ月ほど各國の工場を視察する豫定が殘されていましたが、これは名目上のことで本當は赤毛布よろしく殘った金をできるだけ儉約しながら佛蘭西と伊太利の大きな街を見物して日本に戻るつもりでした。

ストラスブルグから巴里にきた時はちょうどXマス前のあわただしい氣分が街にみなぎっている頃でした。佐田夫婦は二流か三流といったホテルに小さな部屋を借り、知人や子供たちに土產物を買いに出たり、案內パンフレットをひねくりながら所謂、巴里の名所舊跡を歩いてまわりました。

この頃から佐田は妙に躰のけだるさを感じはじめました。始めは馴れぬ石疊の路やホテルの階段を一日に幾度も登りおりするせいだろうと考えていましたが、いくら休養や睡眠をとっても疲れは躰の芯からぬけないようです。そのうち、左の腿から脚にかけてかるい引攣るような感覺が始まりました。一寸した坂を登っても息がきれるようですし、掌や頰に時々、火照ったような感じのすることがありました。

かつて患った肺が再發したのではないかという暗い不安が佐田の心をかすめました。五、六年ほど前、佐田は左の鎖骨の下に直徑一糎ほどの病巣を發見され、二年間ほど治療をうけたのです。幸いその時は病巣がそれほど大きくなかったため、半年ほどすると氣胸をうけながら會社に通うことも出來たのですが、

「再發はしないで下さいよ。佐田さん。今度、再發すればね、肋骨の二、三本は切らなくちゃなりませんよ。」

そう、醫者にいつも言われていたのです。

クレベール街を歩きながら佐田は鼠のように狼狽した眼で妻を眺めました。なにも氣づいていない彼女は巴里に來てから買った帽子をかぶって、ショウウィンドオを一軒、一軒のぞいていました。

「やはりこちらの品物は染色がちがうんですね。こんな色、とても日本では出せないですわ。」それから夫の怯えたような眼つきに氣がついて、「どうしたんです。脈などはかって。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com